



人生最後のとしおとこ・回想記

西区・武岡支部 いなもりクリニック | 稲森 洋平



あけましておめでとうございます。

今年（乙巳きのと・み）、辛巳（かのと・み）に生まれて7回目、次の8回目は私には無縁であろうと思われるので、此れまでを振り返ってみるのもアリかなと筆を執りました。

太平洋戦争の端緒となった日本海軍のハワイ・オアフ島での奇襲作戦（真珠湾攻撃）のあった昭和16（1941）年は長期化する日中戦争で国民には物価高や統制強化に不満、閉塞感が張っていたようだ。丁度その頃、軍医だった父が所属していた熊本の渡鹿練兵場の宿舎？で産婆さんに取り上げて貰った私はへその緒が巻き付き難産だったらしい。

昭和20年の鹿児島大空襲の際は母の田舎（敷根）に疎開し皆無事に終戦を迎えたが、西田小学校近くの薬師町の実家には機銃掃射の跡が柱、床などに生々しく残っていた。

周辺には田圃が広がりフナやドジョウ掬い、コンボイ（ギンヤンマ）取り、常盤の裏山では防空壕探検、ジャングル遊びなど昔ながらの遊びにはこと欠かなかったことを思い出す。

病気知らずで元気に小中高を鹿児島で過ごした後、鹿児島大学農学部時代に培った空手魂、“畳1枚、根性あればできる”の心意気

と苦学の同級生との出会いで一念発起、熊本大学医学部専門課程に編入学してからは日々の学習に追われたが空手・自己鍛錬は続けた。

昭和45年4月からの卒後研修で産婦人科、整形外科、麻酔科、第三内科（消化器・循環器）の順に各科をローテーションした中で、麻酔科は森岡教授をはじめ新進気鋭のスタッフから多くを学び、premedicationで外科系の病棟を回り交流できたのも医局選択に役立った。先代教授の急逝に伴い昭和45年8月に誕生した赤来正信教授の第二外科へ入局、先輩諸氏に鍛えられ昭和47年11月、大勢の仲間に見守られ鱒坂春子と永遠の契りを結び、志布志港からサンフラワーで名古屋港へ渡り、日産サニーで陸路、日本海岸寄りに青森へ、次いで太平洋岸を下り、東京、横浜-鹿児島約3週間の旅を終え、初めての外勤生活を始めることになった。

医局長によるあみだくじで、希望者の多い近隣の大病院A、遠方で地の利の悪いC、その中間のBグループに夫々振り分けられ、小生は誰も希望しないCグループの牛深市民病院に当たった。内科、小児科、産婦人科、整形外科に院長と二人の外科から成るコンパクトな病院でありながら、外科手術のみならず、救急疾患など第一線の臨床に携わらせて貰えた。Appendectomyは2年間で約200例担当させて貰い、腹を触ったら判ると過大な自信を芽生えさせるほどだった。

ゴルフを始めたのも整形外科医の手ほどきからで、東京のアメヤ横丁でリンクスのゴルフ一式をぶら下げて帰宅したが、開業してからは活躍の場は無くお蔵入りが続いている。

家内は懇意になった港の魚屋さんに、魚の

鮮度を見極めやさばき方などを教わり、臨月を迎えた2年目の春には産婦人科の方々にお世話になった。その時の長女は3人の子宝に恵まれ半世紀を過ぎた。夏の甲子園大会で鹿実の定岡投手が熱闘している頃、教授の計らいもあり天下の順天堂大学・白壁彦夫教室で消化管の研修をさせて頂き、公私共にとても有意義な外勤生活となった。昭和50年に第二外科医局へ戻ってからは大腸グループの一員として臨床・研究に携わりながら、tattooを入れた威勢のいい男衆が大半の長期・累犯者を収容した熊本刑務所・医務課も掛け持ち勤務した。色々要求してくる訴えを詐病か否か、真偽を図り答える必要があり、YESは簡単、NOには食い掛って来るので気を使ったものだ。

小国公立病院では外傷が多く、インターネット社会の今では考えられないが、レントゲン写真を携えて阿蘇外輪山経由、熊本大学整形外科医局を往復し診断を仰ぐことも度々だった。

ラットを用いた大腸がんの病理組織学的研究では幾度か挫折感を味わい乍ら一段落、学位取得後、熊本大学外科学第二講座助手を拝命、任を終え、健康保険組合・八代総合病院（現：熊本総合病院）へ第二外科部長として単身赴任しながら乳腺、甲状腺、消化管、肝胆膵など幅広くメスを握らせて貰い、改めて外科医を実感したものだ。

脂の乗った平成2（1990）年12月、前々から懇願されていた健軍の民間病院に副院長として誘われ、後ろ髪をひかれる思いで八代総合病院を退職した。

熊本城を直ぐ目の前に歩いて数分の丘陵地帯の京町から自衛隊駐屯地近くの健軍までの6km、運動を兼ねて自転車通勤しながら充実した診療の日々を送っていた或る日、院内のスクリーニングCT検査で左腎腫瘍が見つかった。丁度、平成7年1月の阪神淡路大震災、3月の東京地下鉄サリン事件で世間が騒々しい中、今は亡き院長合意のうえ熊本国立病院で左腎摘出術（renal cell ca.）を受けた。

無事入院治療が終わり、今度はこちらが恩返しする番だと意気込んでいたところ、院長から給与減額や診療体制の見直しを迫られ、熟慮の末、郷里に帰ることにした。

一般サラリーマンなら定年を迎える年ごろ（57歳）で、当時の新聞に“円の対ドル相場120円、消費税引き上げに伴う個人消費の落ち込みが過去10年間で最悪のマイナス28.5%”との景況判断報道もあり、父の内科医院ではなく、交通の便の良い西鹿兒島駅（現在の鹿兒島中央駅）から約200mの鯉坂外科医院の跡地に無駄を省いた診療所を新築開業した。

漢方を始め、日ごろの診療に関係する催し（最近ではWeb）には興味を持って取り組み、自分の診療限界をわきまえ病診連携を計り、誠実をモットーに、且つ毎日のストレッチ体操で気分転換し、病で休診することなく7回目の年男を迎えることが出来た。

これは偏に月1のパッチワーク教室での作品づくりを唯一の楽しみに、家事、医療事務、診療補助などオールマイティーの妻とスタッフのお陰と感謝している。

最近では、スズメ達が写真のように朝夕、玄関先に餌を求めて30～40羽群れを成して飛んでくるようになり心を癒してくれているが、愛車の屋根に白い糞をまき散らすので痛し痒しと言ったところ。昔を振り返り思いつくまま書いて来たが、時代は大きく変わり、生成AIとか、すごいテクノロジーが発達して来た。今や人類共通の課題である気候変動対策等に活路を見出して欲しい。

新年に当たり皆様のご健勝とご多幸を祈って、筆を置かせて貰います。

